

〈翻訳〉

エミリー・ディキンソンの詩・20篇

児玉実英

Summary

Twenty poems by Emily Dickinson are selected and translated into Japanese here with notes, comments, and a brief bibliography. One of the most unique of nineteenth-century American poets, Dickinson wrote about 1800 poems in her life. Most of her works are often described as charmingly beautiful; but, because they are condensed into utmost brevity, they often have multiple levels of meaning, and are therefore ambiguous and occasionally obscure.

Accordingly, many translators have attempted to render them into Japanese, for years. And I have always felt that many of them are good enough, but not satisfactory enough, sometimes with misunderstandings and sometimes lacking poetic delicacy in the translated Japanese.

I am aware of the impossibility of translating poetry perfectly. But I dared this time again to translate those poems of Dickinson, and I hope my renderings may satisfy many Dickinson lovers and scholars as well as critics.

エミリー・ディキンソンは、数多いアメリカの詩人のなかで、極めて評価の高い一人である。彼女の詩の特徴は、研ぎ澄まされたことばを、極めて凝縮された表現の中に閉じ込め、まるで小さな宝石箱を開けた時のような衝撃を与えつつ、自然や愛や喪失や死をうたったものが多い、ということである。その結果、19世紀を代表する詩人でありながら今日まで広く読まれ、詩を書く多くの現代人に影響を与え続けているのである。

彼女は1830年、マサチューセッツ州アーモストの町に生まれ、1886年、同地で亡くなった。祖父サミュエル・ファウラー・ディキンソンは、アーモス

ト大学の創設にかかわり、父エドワード・ディキンソンは、アーモスト大学の財務理事をつとめ、兄オースティンも父のあとを継いで同大学の財務理事をつとめた。エミリーは、寮生活をしながらマウント・ホリオーク大学で学んだり、目の治療をかねてボストンに出かけたり、国会議員に選出された父を訪ねてワシントン DC に旅行したりしたが、それ以外はほとんどアーモスト町にとどまり、詩を書いていた。

エミリー・ディキンソンの詩には表題や見出しがつけられていないものが多く、そのため、各詩に番号をつけるならわしになっている。以下、各詩の頭につけた番号は、トマス・H・ジョンソンの編集した詩集の J 番号。F の後の数字は、R. W. フランクリン版の番号である。(主要参考文献参)

エミリー・ディキンソンの詩

4 F 3

このふしぎな海に
帆をあげて
静かに船出——
わーい——
水先案内人さん
白波が吠えない
嵐の来ない
そんな岸边をご存知ですか？

静かで穏やかな 西のかなた——
帆船がいくつも
しっかり錨をおろして

泊まっているところ——

そこへ、私が、ご案内しましょう——

——「おい 陸地が見えたぞ」——

永遠です！

さあ、上陸——！

1853

49 F 39

いままで、私は、二度も

失ったことがあります。

それは、芝生でのことでした。二度、私は

神さまの扉の前に、物乞いのように

たたずみました。

天使たちが、二度舞い降りてきて

私の失ったものを、返してくれました。でも——

どろぼう！ 銀行家！ お父さま！

また、私は、無一物になりました。

1858

67 F 112

成功したことの無い人には

成功は とても甘美なものに思えます

神々の生命の酒を 味わうためには

切なる願いが 叶えられなければなりません

きょう 血にまみれ
敵旗を奪った軍勢も
だれ一人 勝利の意味を
ほんとうに解っていません

戦いで倒れ 死にゆく人の
聞こえなくなっていく耳もとに
遠くから凱歌が どよめくように
もだえさせるように
はっきり聞こえてくる——
そんな人に比べれば——

1859

76 F 143

歓喜とは、内陸に住む人が
海に向かって、船出すること。
家々の前を通り、
岬を過ぎ、
深い永遠の中へと。

私たちは、山育ちです。でも、
船乗りさんは、私たちが陸を離れて
最初の一リーグ沖に出るまでの
天国のような陶酔を
ほんとうにお分かりでしょうか。

1860

125 F 109

恍惚の一瞬を味わうには
その欣こびや——身ぶるいの
度合いに応じて
苦痛を支払わなければなりません

心おどるひと時のためには
長年の辛い窮乏——
激しい争いのすえ手にした僅かのお金——
涙がいっぱいの宝箱——が
必要なのです
1859

165 F 181

鹿は、撃たれたとき、最も高く跳び上がる——と、
猟師から聞いたことがあります——
まさに死の恍惚なのです——
そのあと——やぶは静かになります！

岩盤が打ち砕かれると、水が湧き出る！
鋼鉄は踏みつけられると、撥ね返る！
結核は侵攻が進むと
頬の血色がよくなる！

微笑みは、苦悩のよろい——

それで——用心深く武装しているだけです——

だれかに、血を見られて

傷だ！ と叫ばれないように。

1860

214 F 207

醸造されていないお酒を、わたしは味わっています。

真珠貝ですくって—大きなカップから—飲んでいきます。

こんなにおいしいお酒は

ラインの河沿いの、どんな蔵の樽だつて—

造れないでしょう。

わたしは空気の酔っぱらい—

露の放蕩むすめです—

いつまでも暮れない夏の日々

まっ青な天井の居酒屋を

ちどり足でめぐります。

酔いどれの蜜蜂を—

ジギタリスの主人が、玄関から追い出しても—

蝶がちびりとやるのを—止めにしても—

わたしは、もっと飲み続けるのです。

やがて空から—

天使たちが雪のような帽子を振って—

聖者たちが窓辺に走り寄って—

このちっちゃな酔っぱらいが
太陽にもたれかかっているのを
見ることでしょう。

1861

228 F 321

金いろになって燃え上がり、紫になって消える
ひょうのように空高く舞い上がり
いつもの地平線に、まだらの顔を寄せて一
降りていく

かがみこみ一頭をさげて一かわうその家の窓をのぞき
納屋の屋根を撫でて、赤く染め一
牧場に向かって帽子で投げキスをする一
そして、この光の奇術師は一退場する

1861

241 F 339

私は苦悩する人の顔が好き一
それが本当の顔だ、とわかるからです。
人は発作を真似ることなど、できません。
苦痛を装うことも一

眼が一度くもれば一それは、死。

苦しみに衰弱し

額に汗粒を浮かべるなど—
見せかけでは、できません。

1862

245 F 261

宝石を握ったまま
私は眠りにつきました。
その日は、なま暖かく、散文的な風が吹いていました。
失くすことなどないわ、と、私。

でも目が覚めて—私は
正直者の指を叱りました。
宝石がなくなっていたのです—
いま、残っているのは、ただ—
紫水晶の—思い出だけです。

1861

303 F 409

魂は、心の友を一人選び—
扉を閉じてしまいます。
立派な方がたくさん来られても—
姿を見せません。

魂は—門の下で、馬車が止まっても—
心を動かしません。

皇帝が、玄関のマットに跪かれても—
心を動かすことはありません。

私はよくわかっています—
魂は、ありあまる人の中から、ただ一人を選び—
関心のバルブを一固く閉じてしまうのです—
石のように。

1862

324 F 236

安息日に、教会へ行く人がいます。
私は、家で安息日をまもります。
庭の果樹園が、円天井—
ボボリンクーと鳴く鳥が、少年聖歌隊員。

安息日にガウンを着る人がいます。
私は、翼をつけます。
この小さな堂守は、教会で鐘を撞かず、
かわりに、歌います。

神様ご自身が、説教者。有名な牧師さまです。
話は長くありません。
最後に天国に行き着くのではなく、
私は、天国を歩いているのです。

1861

328 F 359

小鳥が、庭の小道に舞い降り—
私が見ていることなど、気がつかず—
みみずを、への字にくわえ、
生のまま、食べてしまいました。

そして、手ごろな草の上ののった露を
ひとしずく吸い、
垣根のほうに横とびして、
かぶと虫を通してやりました。

あちこち眼を動かし
観察しています。
びっくりしたビーズ玉のよう—あ、
ピロードの頭を、かしげました。

おそろおそろ—危険なところにいる人のように—
パン屑をさしだしました。
と、彼は羽をふくらませて空にむかい、
大気を切って、漕いでいきました。

航跡というには、あまりにも銀色に輝く筋を残して—
大海をかき分けるオールよりも—
真昼の堤から
しぶきも立てず、飛びたって泳ぐ
蝶々よりも—

柔らかかに。

1862

341 F 372

心の激痛が去ったあと

感情は空洞化して、形だけが残ります。

神経は、まるで墓石のように一儀式ばって座り、

心は硬くなって、たずねます。

ここまで連れてきてくださったのは、あの方でしたか、

昨日でしたか、それともなん世紀も前のことでしたか、と。

足は棒杭のように

地上であれ、空中であれ、どこであれ、

機械的に、動きます。

そして、石のように、無頓着になります。

石英の満足。

もし生きながらえれば—これは

記憶の底の鉛の時間。

凍死する人が、

先ず悪寒一次に無感覚—そして、すべてを諦め、

雪に身をゆだねるのと、同じです。

1862

441 F 519

これは—私に返事をくれたことのない
世間への—私の手紙—
自然がやさしく—おごそかに—
語りかけてきた—素朴なたよりなのです。

自然は—見えない手に
彼女の言葉を—ゆだねてきます。
やさしい皆さん—彼女への心くばりと思い—
私のことを—お手やわらかに—
ご批評ください。
1963

448 F 446

詩人とは—
ふつうの意味から、びっくりするような
意味の花心を蒸留できる人—
戸口のドアのかたわらで、いつも見なれた草花から—

しおれたあとでも—
かぐわしい香油をとり出せる人—
今まで私たちが、どうして、それに
自分で気づかなかったのか—ふしぎですが—

詩人とは、絵の覆いをとる人—

詩人に比べれば

私たちは一いつまでも乏しい者—

詩人のかぐわしい宝物を

少し盗んでも—彼は気がつかないでしょう—

詩人は被害など受けませんから—

詩人は自分自身が財産なので—

そして—時間の外にいる人です。

1862

585 F 383

私は、それが、なんマイルも駆けぬけるの
見るのが、好きです。

平地を、なめるように這ったかと思うと—

タンクの横に止まり—水を飲ませてもらう—

大男のような足どりで、山並みを一つ廻り込んで走り—

線路脇の小屋を、尊大に眺め下ろすかと思うと—

石切り場を切りとり

脇腹の巾にあわせて

その間を這いぬける。

恐ろしい声でふん、ふんと韻をふみながら

不平を鳴らし

それから、坂を急いで下りる。

「雷の子」のように大声でいななき―
星のように正確に―自分の馬小屋の前に―
おとなしく―そして全能者然と―
止まる。

1862

712 F 479

死が迎えに来たとき―
私は立ち止まらず、歩き続けました―と
彼が馬車を止め―
親切に、私を乗せてくれました―
馬車には私たち二人と―不滅だけ―

ゆっくり揺られていきました―
死は急ぐことをせず―丁重でした―
私は、仕事や余暇の楽しみを
ほうり出していました―

私たちは―学校で休み時間に―子どもが
輪になって遊んでいるのを眺めていきました―
麦畑で―穂が目をむいている横を歩いていきました―
沈んでいく太陽のかたわらも通りすぎました―

いや太陽が、私たちから遠ざかっていったのです―
露がおり―震えるような寒さが襲ってきました―
私は薄いガウンに―薄絹のストールを

はおっているだけでしたから—

私たちが馬車をおりたのは
土がふくらんだような—おうちの前—
屋根はよく見えませんでした—
柱のじゃばらは土の中にありました—

それから—なん世紀たったでしょうか—
でも—あの一日より—短く感じます—
馬の頭が—永遠に向かっている—と思った
あの一日より—

1862

986 F 1096

ときおり草むらを—
細長い生きものがうろつくでしょう—
見かけたことが—おありですか—
それに気づくのは、突然、です。

草むらを—櫛を入れたように分け
斑点のある棒きれが動き出すのです—
足もとの草は閉じ—
むこうの草が開きます—

この生きものは湿った地面を好み—
穀物が育たない冷たい土地が好き—

子どものころ、はだしで歩いていると—
真昼の太陽にあたって、よじれた

鞭ひもが落ちているのか—と
かがみこみ、掴もうとすると—
それが、縮んでくねり、姿を消してしまう—
そんなことが一度ならずありました。

自然界には、私のよく知っている生きものが
いろいろ住んでいます—彼らは私のことを
知ってくれています—彼らとは心が通い
うっとりするくらい愛情を感じています—

でも、この細長い生きものに出くわすときは—
私が一人にいるときでも、なんんかと一緒にのときでも—
いつも息がつまり—
骨の中がゼロになります。

1865

1052 F 800

私はイギリスの荒野を見たことはありません
大海原も見たことはありません
しかしヒースの広がる風景も
大波がうねる光景も
目に浮かべることができます

私は神さまとお話したことはありません
 天国をお訪ねしたこともありません
 しかし天国の場所は
 合い札をいただいているように
 よくわかっています

1864

注

4 F 3

この詩はエミリー・ディキンソンが23才のころ、元気で明るいころに書かれたもの。船客が水先案内人を案内するという、茶目っ気たっぷりの設定になっている。詩の中で語っているのは、少女のような彼女の等身大の才気あふれる女性像を思わせる。

最後から3行目“Land Ho!”は、「おーい、陸地だぞー」という船乗りの用語をまねて、女の子が叫んでいる、ととるのが普通かもしれないが、「おーい、陸地が見えましたよー」ではインパクトがない。ここではマストの上で、見張りをしていた水夫が、甲板に向かって叫んだ、ととるほうが、ドラマがあっっておもしろい。水夫は「陸地」しか見えないが、女の子は、それが「永遠」という時間を超えた概念がイメージ化されたものと見るのだから。

49 F 39

「芝生」は、墓地を暗示している。

「失ったもの」は何か。「どろぼう！」や「銀行家！」から連想されるのは、「もの」とか「かね」だが、ここでは命と同じほど大切な精神的な「信仰」とか「愛」とか「目標」とかを強く暗示している。もし「愛」だとすれば、伝記的には、2人の男性との出会いと別れが思い合わされる。しかしディキンソンは、それをどうしても秘めておきたかったのだろう。失ったものについて黙して語らず、読者を困らせながら、この詩は美しい倍音を残して終る。彼女は「意地悪！ 才女！ 詩神！」なのだ。

67 F 112

「生命の酒」ギリシャ神話に登場する神々が飲むというネクタール。

この詩を読むと、このころまでにディキンソンは、成功しなかった者の視点から世の中を見るようになっていたことがわかる。

第2、3連では、やがて身近なところに迫りくる南北戦争の悲劇や犠牲を予知し、

警告を発しているようにも読める。

76 F 143

「一リーグ」約4.8キロメートル。

214 F 207

「ライン河沿いの、どんな蔵の樽だって」フランクリン版ではイメージ化しにくいので、ジョンソン版をとった。

「ジギタリス」は南ヨーロッパ原産の多年草。夏、薄紫の花をたくさんつける。別名「狐の手袋」。

「天使たち」原詩は“Seraphs”（最高位天使たち）。天使たちには多くの階級があり、キリスト教文化圏では“Seraphs”という表現でなにを意味するか読者に十分に伝わるが、邦訳で階級にこだわると、かえってイメージがぼやけるので「最高位」を省いたほうが良いと判断した。

228 F 321

太陽のいきいきした動画的描写。色彩も美しいが、比喩とりわけ巧みな擬人化は、瞠目に値する。

245 F 261

この詩も喪失がモチーフになっている。美しい思い出の中で光る紫水晶には、どんな意味を含みこませているのか、エミリーの思いはわからない。一見単純に見えるが、この詩も、読む者が解釈を大きく膨らませることのできる奥の深い詩である。

585 F 383

「線路わきの小屋」1852年の4月ころ、「アーモスト・ベルチャータウン鉄道」工事のため、線路沿いに「200人のアイルランド労働者」の小屋が、次々建てられた。

「雷の子」キリストがゼベダイの2子ヤコブとヨハネに与えた名。（「マルコ」3：17）

「星のように正確に」ここでは、ジョンソン版のほうが、フランクリン版よりメタファーが適切で、コンテキストに厚みがあるので、そちらをとった。

アーモストの南西にあるベルチャータウンから鉄道が延長され、「アイアン・ホース」とあだ名された蒸気機関車が、いよいよアーモストに姿を現したとき、町の人々は興味津々で見物に行った。エミリーの父は、この鉄道会社の役員だった。駅舎は、ディキンソンの家から東に向かって低くひろがるディキンソン・メドウ（かつてエミリー

の祖父サミュエル・ディキンソンが所有していた)にあった。蒸気で走る列車が、静かな田園に闖入してくる強さに感心しながらも、その横柄さに困惑する町の人々の複雑な気持ちを、エミリーも共有していた。しかし彼女は、興味津々ながら、すこし離れた高い立ち位置から、これを眺め、馬のようで馬でなく、怖くておとなしい、かわいくておもしろい機械として描いている。19世紀アメリカ文明を扱った古典、レオ・マークス著『庭の中の機械』にもこの詩が取り上げられている。

主要参考文献

- Bingham, Millicent Todd. *Emily Dickinson's Home*. New York: Harper and Brothers, 1955.
- Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport, CT: Greenwood Press, 1998.
- Franklin, R. W., ed. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. Cambridge, MA: The Belknap Press, 1998.
- Johnson, Thomas H., ed. *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Boston: Little, Brown, 1951, 55.
- Marks, Leo. *The Machine in the Garden*. Oxford: Oxford University Press, 1964, 2000.
- 大木剛士編『日本におけるエミリー・ディキンソン書誌 (1896-2000)』専修大学出版局、2002.
- 鵜野ひろ子訳、ジェイン・D・エバウエイン編『エミリー・ディキンソン事典』雄松堂、2007.

解説 (あとがきにかえて)

詩の翻訳は、大変むづかしい、とよくいわれる。たしかに詩の翻訳は、正確で読みやすくなければならないのは当然として、いくつかのヴァリエント(異文)が存在したり、いくつかの解釈が可能であったりする場合には、そのうち一つを選ばなければならない。そのうえ、訳した後、詩になってなければならぬのである。

だから、よい訳詩に出会うことは、稀である。にもかかわらず、次々訳詩が試みられるのである。とくに原詩が優れている場合には、そうである。

エミリー・ディキンソンの詩も、今までに多くの日本語訳が公にされてきた。大木剛土編『日本におけるエミリー・ディキンソン書誌（1896-2000）』に掲載されているだけでも、相当な数にのぼる。かつて1980年ころ、私も僅かながら試みたことがあり、それも同書に採録されている。しかし、それも含めて、多くの訳詩は、勝手ながら、みな、少しのところ、納得がいかないのである。

今回、上のような20篇を選んで翻訳を試みた。当然のことながら、手を入れるごとに、よくなることも、悪くなることもある。完全な訳詩はないと知りつつも、なんとか書き改めたのち、不満は残るが、ここで思いきって発表することにした。種々ご教示いただければ幸いである。